罪亡き願意の理想庭園

音風 奏 （雅董杏みつ）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
罪亡き願意の理想庭園

【Ｎコード】
Ｎ４８３９Ｙ

【作者名】
音風　奏　（雅董杏みつ）

【あらすじ】
持ち主の願いをかなえる物質、想叶卵。
それは、人の欲望を暴走させるもの。

友情からの嫉妬。
正義からの悪行。
理想からの愚行。

人故に考え、

人故に悩み、
人故に戦い、
人故に泣き、
人故に笑う。
ただ、人故に。

これは。
悪魔と相乗りすることを誓った少年と、人の祈りの物語。

祈ることで日々悩み、
戦うことで正される。

それも、ただ人であるが故に。

異能封印

「これが、今回の想叶卵（ユートピア）……？」
神社の境内で、落ちていた卵のような物を、僕は拾った。
「思っていたより、小さいね」
これは、想叶卵。
そのルーツは分からないけど、僕たち人間の「願い」を生む、卵のような物質。
僕らが始めてこれを見つけてから、もう半年が経ったかな。不定期に見つけるけど、もうこれで十数個くらいは見たと思う。
「とりあえず一件落着、かな」
僕がそう言って力を抜くと、
「でも、気を抜いちゃダメだよ？」
僕の肩に乗る小さな少女が、僕の持っている想叶卵を見つめながら言った。彼女はリリム。僕の十分の一ぐらいの大きさで、実は人間ではない。
けど、彼女は僕にとって大切な相棒だ。
「そっか……それもそうだね」
僕はそう答えて、手に取った想叶卵を握りなおす。
「異能封印（シールイーブ）」
その一言で、僕の握った想叶卵は、小さな灰になって僕の手から零れ落ちた。
「ふぅっ」
そして僕は立ち上がり、手のひらに残った灰を地面に落とす。
「今日は、ちょっと手強かったなぁ」
そういいながら歩き出す僕の右肩で、
「うん、あたしもちょっと疲れちゃった」
リリムがちょこん、と腰を下ろした。僕がなるべく揺れないように歩くと、リリムは髪の毛を結んだリボンを弄りはじめる。こうし

てみると、僕と同じ年の女の子には見えないなぁ。
僕がそう考えていると、
「ねぇ、リンゴ」
リリムが、僕の目をみて口を開いた。
「うん？」
「さっきから言いたかったんだけどさ……」
リリムがそういいながら、その視線を右にずらす。鼻をくんくんと動かして「やっぱり」と呟いてから、
「あそこの草むらから、人のニオイがする」
「えっ？」
予想外のことを言ったリリムの視線の先に、僕も目を向けた。それと一緒に、草むらがガサッ、と音を立てる。
「あ、ほんとだ」
それを見て僕は、確信した。同時に、ちょっと嫌な気持ちになる。まさか、見てたんじゃないよね……？
「おーい、誰かいるのー？」
僕が草むらに声を投げると、そこからひょっこりと、ちいさな頭が出てきた。
「あっ、えとっ、その……」
出てきたのは、不思議な形をしたショートカットの女の子。着ている制服からして、僕の通う海鶯北高校のものだと思うけど、……見かけない子だなぁ。
「……あの、高岩、くん？」
女の子は僕を指差して、恐る恐る口を開いた。
「うん。高岩、燐悟だよ」
僕がそう名乗ると、女の子は険しい表情になって、
「あの……さっきのは……？」
……。
「……見てた？」
ちょっと、厄介なことになっちゃったかな……。僕がそう思って

答えると、
「はぅっ！　ご、ごめんなさいっ！」
突然、その女の子は頭を下げた。
「えっ、あ、うん。気にしないで」
どうやら彼女は、僕が想叶卵を異能封印するまでの全てを見ていたようだ。……さて、怖がっているみたいだけど、仕方ないや。
「リリム」
「オッケー」
背中の羽を羽ばたかせて、リリムは僕の肩から女の子のもとへと飛んでいく。
僕のあの姿を見られた以上、あの子の記憶を残しておくわけには行かない。彼女の記憶をリリムの魔法で書き換えてもらおう。そう思ったのが言葉にしなくてもリリム本人に伝わったみたい。ほぼ毎回のようにやっているから、彼女も言わずと分かったのだと思う。暗黙の了解、っていうのかな？　そんな感じ。
「さて、都合のいいように書き換えないと……」
リリムの手が彼女の額に触れる。リリムは普通の人には見えないから、気付かれないうちに記憶を消せる。
と、思っていたけど、
「……あれ？」
リリムは突然、女の子の額から手を離した。
「おかしいな、あたし、ちゃんと魔法かけたのに……？」
自分の手と女の子を交互に見やる。
と、
「……えっ？」
当の女の子が、驚きの声を上げた。
「妖精……さん？」
……あれ？
僕の違和感と共に、リリムが僕を手招きする。僕はリリムに従って、女の子のもとへと歩み寄った。

「ねぇ、もしかして……」
僕ではないものを驚きの目で見つめる女の子に、僕は改めて声をかける。
「リリムが、見えるの？」

悪魔転身

「魔法が効かない体質？」
僕の言葉に、リリムがうん、と頷いた。
「何百人に一人、悪魔の魔法が効かない人間がいてね、人間にもいろいろいるから、この子みたいに魔法への耐性が極端に強い子もいるし、リンゴみたいに魔法を受けやすい子もいるの。だから、多分この子はその「耐性が極端に強い子」なんじゃないかな……」
なるほどねぇ……。
「リリムが見えるのも、そのせいってことだね」
リリムは普段、普通の人には姿が見えなくなる魔法を自分にかけている。
彼女自身が「なにかと都合がいいから」って言っていたのだけど、魔法が効かないのなら、見えなくしていても見える。そんなところかな。
僕がそうして考えていると、
「あ、あの……」
木の陰に身を隠した、例の女の子がおずおずと声を出した。
「高岩くん、その子は一体……」
僕の肩の上に乗ったままのリリムを指差すその子。
「あ、この子はリリム。僕の相棒だよ」
「よろしくねっ」
リリムがニコッと微笑みかけると、女の子は何か焦った様子で、
「あっ、私、夢町琴子っていいます。おくれちゃってごめんなさいっ」
ぺこりと頭を下げる。それを見ていた僕は、
「あっ、そういえば」
今更だけど、変な事に気が付いた。
「夢町さんは、どうして僕の事を知っているの？」

僕は彼女にあったことがないと思っていたけど……、僕がそう付け足そうとして、やめた。彼女が、とても悲しそうな顔をしたからだ。
「やっぱり、覚えてませんか……？」
えっ……？
最初、僕には彼女の言っている意味が分からなかった。けど、その口ぶりを冷静に分析すると、どうやら僕たちはどこかで会ったことがあるらしい。
「……ごめんね。どうも僕は、人の事を覚えるのが苦手な体質みたいで」
似たようなことが何回かあったので、自覚はある。
「そ、そうですか……」
何か、悪いことをしちゃったな……。
僕がそう思ったその時、
「――っ！　リンゴ！」
突然、リリムが僕の肩を引っ張った。
「う、ん？」
その力が強くて、僕の体が右側に傾く。僕がそこでバランスを取ろうとした時、
ヒュン！
「っ！」
僕の左脇の下を、何か小さな物が通り過ぎた。
その小さな物は、少し先の地面に突き刺さる。それを見た僕はやっと、それがナイフであることに気が付いた。
「誰っ！？」
リリムが僕の肩から飛び上がって、僕より一足先に、ナイフが飛んできた先を睨んだ。
と、
「ちっ……」
そこには、見たことない生命体がいた。木の枝に四本の足で立っ

ていて、その背中には何本ものナイフがロケットランチャーのように装備されている。
機械と生物が混ざったようなその外見が、僕は何と関連しているかすぐに分かった。
「誰かが、想叶卵を孵化させたんだね」
そう。これは、想叶卵が人の願いを実体化させた姿。つまり誰かが、また別の想叶卵を手に入れたんだ。
「そこのきみ、僕らに何の用だい？」
その怪物に僕は言葉を投げかけるけど、怪物は口を開くことなく、その背中に背負ったロケットランチャーを構えた。
「聞く耳も持たない、って様子だね」
僕は半歩後ずさって、気の影にいた夢町さんに一瞬だけ目配せをした。
「夢町さん、僕より後ろで隠れててくれる？」
この様子だと、この怪物も異能封印しないといけなさそうだ。人に害を及ぼす想叶卵を、放っては置けない。
「あ、は、はいっ！」
そう言った夢町さんは、僕から離れていった。確認はしていないけど、足音が少しずつ遠ざかっていくから分かった。
僕は視線だけで怪物を威嚇しながら、
「リリム、行ける？」
リリムが肩にいることを確認した。
「いけるも何も、やるしかないんでしょ？　じゃあ行かないと」
「だね」
僕のその言葉を合図に、リリムは僕の肩から飛び上がる。一度僕の身長の二倍ぐらいまで飛び上がったリリムは、そこから僕めがけて急降下してくる。そして、
「がぷちゅ！」
僕の首筋に、噛み付いた。その瞬間から、僕の体に巡る血液（セーフティ）が彼女に吸われていく。

リリムがある程度僕の血液を吸い取って、再び僕の上空に飛び上がった。
「「転身っ！」」
僕とリリムが声を揃えて、そう叫ぶ。

血液の濃度が下がった僕の体は、全身から力が抜ける。けど、その「抜けた力」の穴を埋めるように、僕の体内から魔力が全身に行き渡る。
まず、背中から溢れ出た魔力は、やがて羽を構成する。
さらに両手から溢れ出た魔力は、やがて爪を構成して。
そして頭皮から溢れ出た魔力は、やがて角を構成した。
やがて魔力が体全体に循環したのを感じた時、
「よしっ！」
僕の転身は、完了した。

「さあ、悪魔と相乗りしようじゃないか」

激魔砲弾

怪物の背中から、三本のナイフが放たれた。僕はそれを、足のステップを駆使してよける。

「きみは、誰の想叶卵から生まれたんだい？」

僕がそう問いかけても、怪物は背中にナイフをリロードするだけで、答えてはくれなかった。

「この姿を見せても、きみは口を開かないようだね……」

そもそも想叶卵というものは、持ち主の思考と意識を完全にコピーし、共通のリンクを作ることで、その願いを叶えるために怪物を作り出す。だから、怪物にも持ち主の意識が乗り移るし、持ち主の思うように操られるんだ。

それでもこの怪物が口を開かないところを見ると、どうやら持ち主そのものが、僕に言葉を発したくない、ってところかな。

「少しぐらいはなしてくれても……いいじゃないかっ！」

僕はそういいながら、神社の壁に触れた。するとそこに僕の魔法陣が浮かび上がり、二本の柄が現れる。

柄を握って壁から引き抜くと、それは二本の短刀として、僕の手に具現化された。

「はあっ！」

僕は羽を使って飛び上がり、木の枝にのった怪物へと刃を向ける。

けど、怪物は僕の攻撃をやすやすと避けられてしまった。怪物はそのまま、再び攻撃にかかろうとする僕の背中に、その背中から十発ほどのナイフを穿つ。僕はそれを横目で確認しながら、羽を駆使してよけた。

そんな、攻撃と回避が表裏一体となった戦闘中、僕は少しあせっていた。……まずい、このまま長期戦が続けば、不利なのはこっちかな……。

実はさっきも想叶卵を異能封印するために戦ったばっかりで、一日に二回も戦闘をすることなんて、今までほとんどなかった。僕も、僕の意識と一体化したリリムも、前回の戦闘でかなり体力を消耗していて、とても全力では戦えない。

「やっ！」

短刀を投げつけて、怪物の背中のロケットランチャーを壊そうとした僕だったけど、その攻撃すらも、当たる前にナイフの弾丸で叩き落されてしまった。

僕は、魔法で短刀を自分のもとに呼び寄せて、少し距離を取る。

「仕方ないから、ここは一撃でしとめさせてもらうよっ！」

覚悟を決めた僕は、角の上に短刀をかざした。途端、短刀は僕の角と一体化して、僕の角はふた周りほど大きくなる。

「目標捕捉！　魔力集中（エイム）！」

僕は指で、怪物に狙いを定めた。

「必殺行くよ！」

同時にリリムが、僕に彼女自身の魔力を送り込んでくる。

「はぁぁぁぁあっ！」

僕はその巨大な魔力を、角の間に集めた。魔力はそこで具現化して、大きな藍色の球体を生み出す。球体がある程度大きさを増した時、そこには赤紫色のスパークが迸りはじめた。

具現化した魔力球は僕の頭上に少しずつ昇っていき、そこから漏れ出すスパークが円を描いた。現れた円は三つで、その全てが、僕と怪物との間の空間に貼り付けられ、右向きに回転をはじめる。

僕は魔力球のもとへとさらに飛翔して、僕の中に残った魔力を、こんどは右足に集中させた。右足からも魔力が漏れ出して藍色を纏い、そこから赤紫のスパークが生まれる。

「「激魔砲弾（ティロ・キャノーネ）！」」

羽を軸に、僕は右足で魔力球を蹴った。魔力球が前方の三つの円の中を通り過ぎるたび、その大きさと速度を増す。

やがて魔力球が怪物の直前まで迫った時、

「「爆殺（ファイア）！」」
魔力球は炸裂して、怪物はその中に巻き込まれた。

と、思ったんだけどなぁ……。
「逃げられちゃったみたいね……」
僕とリリムがその場を確認した時、そこに想叶卵はなかった。想叶卵から孵化した怪物は、その力を完全に失った時、もう一度想叶卵へと姿を変える。だから、怪物を倒していれば、その想叶卵がどこかにあるはずなんだ。
けど、
「見当たらないね、想叶卵」
僕の視界に、その想叶卵は見当たらなかった。
想叶卵は手のひらサイズだから、探しにくい物ではあるけど……。
そうして、僕とリリムが想叶卵探しを半ば諦めていると、
「あ、あの」
「うん？」
僕の後ろで、さっきまで物陰に隠れていた、夢町さんが口を開いた。
「その、……言いにくいんですけど、いいですか？」
「いいよ、何？」
僕がそう答えると、夢町さんはすこし躊躇うように、
「その、高岩くん。さっきの姿は一体……」
……ああ、そのことか。
「えーっと、僕も説明とか下手だけど、そうだね……」
僕が言葉を選び始めると、それを補うように、
「アレは悪魔。リンゴはあたしと契約した、悪魔なの」
僕の右肩から、リリムが代弁してくれた。
「あ……くま？」
リリムはニコっと微笑むけど、夢町さんは首をかしげた。……リ

リム、煎じ詰めすぎだよ……。
「うーん、リリムの言ってることは正しいんだけど……もう少し、詳しく話したほうがいいかな？」
僕がそうきくと、
「あ、はい。お願いします」
と、夢町さんは頷いた。

思考推察

とはいえ、僕も全てを知っているわけじゃない。
だから僕はとりあえず、「想叶卵が人の願いをかなえる物質であり、そこからは怪物がうまれるこいうこと」と、「僕は悪魔に転身して、人に害を及ぼす怪物を退治していること」までしか話していない。そこから先は、あまり語りたくない僕の過去にまで遡るし、言葉では説明しきれない部分があるんだ。だから僕は、そこまでしか話さなかった。
そして、それから少し時間が経った。
完全に日が沈んだ午後七時、僕は今、自宅でリリムの髪の手入れを手伝っている。
「さすがに、一日に二回の転身は疲れるね」
マグカップのお風呂から上がったばかりのリリムは、少し眠たそうにそう呟いた。お風呂に使ったから、きっとどっと疲れが出たんだ。
「そうだね……」
そう言う僕だって、疲れていないといえば嘘になる。まだお風呂に入っていないから何ともいえないだけで、お風呂から出たときはきっと、リリムと同じように、疲れが体に充満すると思うな。
「そういえば、何であの怪物は逃げたのかな？」
僕がふとそう呟くと、
「うーん、そういえばそのことなんだけどね」
リリムは、僕が手入れをした髪の毛を満足そうに眺めてから、真剣な目つきになった。
「今回の怪物……ううんと、多分なんだけどね？」
「うん」
僕も、その様子に合わせて真剣に聞く。リリムはそんな僕の様子

を確認して、
「今日の戦闘を少し振り返ってみたら、あたし、あることに気が付いたの」
「あること？」
僕がそう問いかけると、リリムは指を鳴らした。すると、リリムの小さな手の少し上に、小さな魔法陣が浮かんだ。そこには、簡単な僕の絵と、怪物の絵が描かれている。その配置関係を見ると、どうやらコレは、今日の戦闘を再現したもののようだ。
「まずはコレをみて？」
リリムがそう言って、その魔法陣に指で触れた。と、僕の絵の後ろに、簡単な夢町さんの絵が描かれる。
「まず、コレが最初のあたしたちの配置」
リリムの魔法陣には、対立するように立つ怪物と僕、さらにその僕の後ろに、夢町さんが配置された。
「ここで、怪物がリンゴに飛ばしたナイフはこう」
リリムがそう言って、魔法陣の中の怪物に触れて、そこから僕へと指をなぞった。そこには白くて薄い線が描かれる。
「そしてここからあたしたちが転身して、同時にコトコがあたしたちから離れた」
うん。僕が指示した事だから、ちゃんと覚えている。魔法陣の中の絵も、僕の記憶どおりに動いた。白い線は残ったまま、僕らの配置だけが変わったんだ。
「ここで、その直後に飛んできた三本のナイフが、こう」
リリムはまたも、移動した僕と怪物を線でつなげる。
「さらに、そのあとの配置はこうなって」
リリムがそう続けると、魔法陣の絵はまた変化した。今度は、僕が羽をつかって怪物に突撃したあとの、僕が怪物に背を向けたときだ。
「ここで怪物は、十本のナイフを撃った」
動き続ける僕の絵と、停止したままの怪物は、またしても数本の

白い線で結ばれる。
「で、この線を延長線上に引っ張ると、こう」
僕と怪物をつないでいた線たちは、僕の絵がある（あった）場所を貫通して、魔法陣を突き破るように伸びた。
「それと、さっきの二回のあたしたちの動きを重ねると……」
魔法陣の中に、僕と夢町さんの絵がさらに二つ増えた。先ほどまで固定されていた位置に二つずつ増えて、魔法陣の中には、僕と夢町さんと怪物の絵が、それぞれ三つずつになった。
合計九人の人物と、十四本の白い線。それを見た僕にも、ようやくリリムの真意に気が付いた。
「そうか……」
その図形に意味はないけど、問題は、白い線の先だ。僕がよけたあとに地面に突き刺さったナイフが四本と、空中に撃たれた十本のナイフの、描いた放物線の先。
そこには、
「最初から、あの怪物の狙いは僕たちじゃなかったんだ……」
決まって、夢町さんがいた。
「あれ、でも――」
僕は、ナイフを弾いたわけじゃない。よけたんだ。だったらナイフは狙いの夢町さんに当たってしまうはずで、でも実際はそうじゃなかった。僕がそう言おうとすると、
「そう、そこなの」
リリムが、ビシッと僕を指差して言った。
「最初から、ナイフはコトコを狙っていたのは多分間違いないよ。……でも、それは全部コトコに当たってない」
……と、すると。
「目的は、牽制……ってところかな？」
「うん……本気では狙ってなかった、ってことだと思う」
……今の話をまとめると、
「とりあえず現状では、敵の狙いが夢町さんにある、ってことだね」

リリムは僕の言葉を聞いて、何も言わずに頷いた。
そうすると……今後の僕がやるべきか、考えないとねぇ……。

灯台下暗

夜が明けて、朝になった。
心落ち着く朝の風を胸いっぱいに吸い込んで、僕は海鶯北高校への通学路を歩いている。これでも僕は十五歳だから、ちゃんと高校に通っているんだ。
学校までの距離は徒歩で十五分ほど。今はもう七分ほど歩いたから、あと半分ぐらいかな。
と、
「燐悟ー、おはよーぅ！」
僕の後ろから、クラスメイトの伊達涼香が駆け寄ってきた。
「指定位置はあの電柱！　まっけねぇぞぉぉぉぉぉぉおおおお！」
……文字通りの意味で。
「うぉぉおおおお！」
僕の後ろから元気に走ってくる涼香は、運動部で鍛えている足であっという間に僕を追い越していった。僕より少し前にあった電柱を通り過ぎたあたりで、涼香はようやく勢いを落とす。
「ゴォォオオルっ！」
元気に両手を振り上げて喜ぶ涼香。僕はそれを微笑ましく思いながら、ゆっくりと涼香のもとに歩いていった。
「ほんとに、涼香はいつも元気だね」
「あったぼうさ！　元気があればァ何でもできるっ！」
涼香はそう言って、カバンからタオルを取り出して汗を拭き始めた。
「それに、そろそろ寒くなって来るからね。朝のうちに体温めとかないと、あとから面倒な事になるのさ。燐悟もやる？」
涼香が僕を見て詰め寄るように言うけど、僕はそれを苦笑いを浮かべて流すことにした。
「あはは、涼香とは違うからね」

「何だよそれ、嫌味？」
「尊敬してるのさ。僕にはそんなこと出来ないからね」
僕がそこまで言うと、涼香は急に黙ってしまった。
「あれ、涼香？」
僕が涼香の顔を見ようとする。
と、
「あっ、あっはははははっ！」
「？」
涼香は急に高笑いを始めてしまった。……なんだよぅ、僕、何かおかしいこと言った……？
「いやぁ、やっぱアンタはあたしの親友だわ！　そーだそーだ！」
その、言ったら怒られるけど女性とは思えない力のある腕で、僕の体を引き寄せる涼香。
「あははっ！　はっはっ！」
……いっている意味が分からないし、なんでこんなに笑ってるんだろう？
「ひー、腹痛っ」
やがてお腹を押さえ始めた涼香は、目尻に涙まで溜めていた。
「なんだよぅ、僕、そんなに面白いことといったー？」
僕はついにそれを言ったけど、
「いや……ひっ！　だっ……ひっ、て……さ、ひっ！」
最早、会話にすらなっていなかった。笑い声が邪魔して聞き取れないよ……。
とりあえず、僕は涼香が落ち着くのを待つことにした。
「ひっ！　……はっ、ふぅ……」
やがて涼香は深呼吸を始めた。もう笑い声を出すのもやめて、静かになる。
「落ち着いた？」
「ま、まあね」
じゃあ……さて。

「ところで涼香。夢町さん、って知ってる？」
僕は夢町さんの事を調べるために、改めて話題を切り出した。涼香は僕より人当たりもいいし、同じ女性同士で何か知っているかもしれない。
「夢町？」
「うん」
「……ああ、窓際の」
……ん？
「あれ、同じクラスだったっけ？」
僕がそう問うと、涼香は一度ため息をついて、
「……燐悟。アンタほんとに、他人のことに興味ないよね……」
「う～ん、そういうわけでもないと思うけど……」
僕はとりあえず、クラスの名簿を思い出してみた。……そういえば、後ろのほうに「夢」の文字が入った生徒の名前があったような気が……する。
「んまあ、それが燐悟だから仕方ないのかもだけどさ？　もうちょっと他人のことに目を向けたほうがいいと思うな、あたし」
涼香の言うことはもっともだとは分かっている。けど、どうもなかなか直らないのが僕の悪いところだなぁ。
どうも、お父さんの教育方針が僕の根本的なところから抜けていこうとしない。あの方針が間違っているのは理屈で分かっているんだけど、体はそれをなかなか覚えてくれないみたい。三つ子の魂百まで、って言うのかなぁ。
僕がそんなことを考えられるくらいの、少しの沈黙があってから、涼香は再び口を開いた。
「んまあ、あたしは仲がいいってわけじゃないから知らないけど、前回のテストはクラス一位だったから、流石に燐悟でも覚えてると思ったんだけどな」
「うーん、僕はあんまり、成績とか気にしないからね」
でも、なんとなく考察は立てられた。成績優秀ってことは、世間

的にはいい子と思われるけど、他人からしたら近寄りがたい物なんだよね。その子の性格や環境よっては、必要以上に避けられてしまったり、酷いと虐められたりするものだからねぇ。

まあつまり、夢町さんを狙うとしたら、その成績を妬む人ってことさ。

学業無能

「はぁい、みなさん揃ってますか～？」
朝のホームルーム。全員が席に着いた状態で、それを見た担任の松屋先生が、確認のためにそう言った。この場合、どこかに空席があると回りの誰かが意見するのだけれど、今日はそういったことはなく、それはつまり、ちゃんと全員そろっていることを示すんだ。
「それでは、ホームルームをはじめますね～」
松屋先生は出席簿を教卓に置いて、それを開いて出席をとり始める。
そんな最中、
――『ねぇ、ちょっといい？』――
リリムの声が、僕の頭の中に聞こえてきた。
――『うん、どうしたの？』――
ちなみにリリムは今、僕の左腰についたベルトポーチの中にいる。彼女は、自分が触れている物体を介して、僕の脳内と直接会話できる魔法を持っているんだ。
――『ちょっと、言いにくいんだけどさ……。この中の誰か、持ってるよ』
――『持ってる？』――
――『昨日の想叶卵だよ』――
っ！
一瞬。言葉の意味を理解するまでに、一瞬の時間が必要だった。
――『じゃあ、つまり昨日の怪物の親が、今このクラスにいるってことだね……』――
想定外、というわけではなかったけれど、やはり驚いてしまった。
あの未知の物質に手を染めてしまった人が、この中にいる。
――『持ち主が誰か、わかる？』――

――『うーん……ちょっとムリかなぁ。人間のニオイにかき消されちゃってて、ほんの少ししか感じないの……』――
――『そっか……』――
どっちにしても、いずれはまた夢町さんを狙ってくるんだ。なら僕は、影から夢町さんを見ているだけしか出来ないね。
そう思って僕が夢町さんを見ると、彼女は不思議そうな顔で僕を見つめていた。うん？　僕の顔に何か付いてるのかな？
ふと見ると、クラスの視線が僕に集まっている。どうしたんだろう……。そう思って初めて、
「高岩くぅ～ん？」
松屋先生に名前を呼ばれていたことに気が付いた。
「あ、はいっ」
どうやら、リリムとの会話に集中していて、先生が僕の名前を呼んでいたことに気付かなかったみたいだ。
「ちゃんと返事してくれないと、先生困っちゃいますよ～」
「すいません……」
僕がそういうと、クラスの視線がまた前を向く。……どうも僕は、物事を同時に行う能力が欠けているみたいだなぁ……。
「さて、では続けて佐藤くん～」

「はぁい、ではテスト結果を返しますよ～」
ホームルーム終了後、松屋先生は横長の紙をもって教室に帰ってきた。
「では、番号順に返しますね～。一之瀬くん～」
今、一之瀬君が先生からその紙受け取っている。きっと僕がもらうあの紙には、いい事は書かれていないだろうねぇ。
先月末にあった全教科テストの結果用紙なんて、渡されても焼却処分したいばかりだしね。
ちなみに僕がここまでテスト結果を嫌がるのは、僕が学業を苦手

としているから、という理由にある。……まあ、ただ単にやりたくないから故なのだけど。
「はぁい、園田さんは今回も頑張りましたね～　よしよし」
松屋先生、生徒を撫でるのはいいから、早く僕にその紙を渡してください。……って、何で僕は急いているのだろう？
「さて、では高岩く～ん」
ようやく呼ばれた。けど、こうなると逆に受け取りたくない。難しい物だねぇ。
とりあえず、受け取った。
そして、
「高岩くぅ～ん、もうちょっと頑張りましょうね～？」
その結果は、やっぱりいいものではなかった。全教科赤点ギリギリセーフだ。
「肝に銘じておきます」
一瞬「善処します」と言いそうになったというのは、秘密。
その紙をもって、自分の席に戻る僕と反対に、隣の席の涼香が呼ばれて、入れ違う。
その瞬間に、
「ま、気にしない気にしない」
彼女に労われた。……まあいいさ、僕はいつもこうだからねぇ。

紅柱大斬

魔力が循環して転身が完了したとき、それまで慄いていた怪物がはっとして、そのロケットランチャーからナイフを発射した。
僕はそれが僕へとせまる前に、その間の空間に魔法陣を具現化させて、それで防いだ。
放たれたナイフは全部で八本。そして、八本目が僕の魔法陣に弾かれたとき、怪物は一度ロケットランチャーを体内に仕舞い込んだ。それは二秒足らずでまた現れ、そこには新たなナイフが装填されていた。……なるほど、ナイフのリロードには約二秒かかるのか。
そう分析している間に、ナイフがさらに八発放たれた。同じ魔法陣で防ぎきれる威力じゃないと判断した僕は、今ある魔法陣の裏に、もう一つの魔法陣を作る。
案の定、五本目のナイフで一つ目の魔法陣は割れてしまったけど、その後ろに作った魔法陣が、それ以降のナイフを完璧に防いだ。
そして、怪物は再びナイフのリロードに取り掛かる。
けど、
「阿吽双刀（ピッチ・ジェネラーティ）！」
そこを見逃す僕じゃない。
僕は両手で、残っていた魔法陣に触れた。するとその位置にまた小さな魔法陣が現れて、もとの魔法陣の壁越しに、向こう側に二本の短刀が現れる。
前回の先頭で両手に持っていた、僕の愛用武器だ。
「はっ！」
小さな魔法陣から、刃先だけが出現していた短刀が、先ほどの怪物のそれと同じように、怪物めがけて放たれる。丁度リロードを終えた怪物が、それを発射した二本のナイフで軌道をそらした。そのとき怪物が放ったのは、今までのようなナイフではなく、俗にソー

ドブレイカーと呼ばれる、片方の刀身がギザギザになった物だ。
ナイフの種類は任意で選べるのかな。厄介な話だ。
「ところで、ねぇ」
僕は魔法陣から手を離して、怪物に話しかける。
「場所を移さないかい？　思うに、遮蔽物や第三者の多いこの場所は、僕だけじゃなくて君にも分が悪いと思うんだ」
しかし怪物は、僕の言葉に聞く耳も持たずにナイフを穿つ。
「無視かい？　やれやれ」
僕はそれを、再び魔法陣で防いだ。どうやら今回の怪物の主は、秘密主義のようだ。
……なら僕は。
「あまり多くの人の記憶に残して、消去の際にリリムに負担を掛けたくないからね。いきなりだけど――」
床に転がった二本の短刀に遠方から魔力を込めて、僕は両手の平に魔法陣を展開させた。その魔法陣から、僕の短刀が召喚される。
「――今日は、トドメを刺させてもらうよッ！」
短刀を構えて、怪物の視線を僕に集中させる。
怪物が僕にナイフを再発射しようとした、まさにその時、
「はあっ！」
僕は、並列処理していた拘束魔法陣を、怪物の下に展開させた。
「今度は、逃がさないよ！」
唸り声を上げながら金縛りを解こうとする怪物の前で、僕は短刀の刃先を合わせて、そこに魔力を込めた。
「魔力集中（エイム）！」
刃先に藍色として目視できるほどに込めた魔力と、そこを迸る赤紫色のスパーク。スパークがさらに藍色の魔力のもとに集まり、それはやがて、真っ赤に染まった巨大な刃となった。
高密度の魔力圧縮刃、というものだ。
「必殺いくよっ！」
リリムが僕の中で、僕の魔力を制御する。今回の技は僕の魔力だ

けで放つ大技だけど、その分どうしても魔力を制御しきれない。だから、リリムにはその制御を手伝ってもらっているんだ。
体に滾る魔力の殆どが、完全に刃になったその時、
「「紅柱大斬(ロッソ・マルテーロ)！」」
僕は両手にもった魔力圧縮刃をふりかざし、怪物を切り裂いた。

ところで、僕の魔力による攻撃では、僕が対象として認めた物質にしか効力がない。
これは僕の魔力が「本来は僕のものではないから」であり、必要以上に破壊活動を行いたくないという、自覚のある僕の意識がそうさせているんだとか。
すべて、リリムの受けおりだけどね。

「やったね」
怪物は僕の攻撃で切り裂かれた。それは確かに分かった。現にすぐ傍に、怪物を産んだであろう想叶卵が転がっているからだ。
「さて、あとはあたしの仕事かな？」
僕の体から、リリムが出てきた。それを合図に、僕の体の変化が終わって、悪魔の魔力が再び僕の体内に戻る。同時に、疲れも。
「リリムは記憶の消去をお願い。僕は、あの想叶卵を異能封印してくるよ」
「ん、分かった」
リリムが魔法陣を展開するのを確認して、僕は想叶卵を拾いに行く。
と、
「だ、ダメっ！」
僕の視界の先で、誰かが僕より早く想叶卵を拾い上げた。
「これだけは渡さないよ！」
そこにいた人物をみて、僕は驚いた。

「え、まさか……」
意外すぎた。いや、盲点だっただけなのかもしれない。半年の間で築き上げた信頼が、無意識のうちに彼女を意識の外においていたんだ。
そう考えればおかしくはない。けれど、信じたくなかった。
「涼香……？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4839y/

罪亡き願意の理想庭園

2011年12月6日23時52分発行